

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
		修 茂樹 マスミ 六弦 はるみ		京子 朝香	俳翁 翔太 喜夫 京子 道を	月を かげろう	ことは のぞみ	允孝	美枝子	曆文 允孝 鶴城		由美子 俳翁 きいち 風舎	由美子 洋一 俳翁 のぞみ 正信	
芭蕉忌やもののははれがわからない	底冷の足音刻む永田町	敷石は母の歩幅に花八手 敷石を母の歩幅に合わせる優しさがにじみ花八手が色を添える。母を思う気持ちが見えます。庭の敷石だろう。少し老いた母の歩幅に合わせて置いた気持ちが優しい。季語とともにお母様への優しさが溢れた素敵な句です。お母様への優しさ。花八手の白がお母様の愛がふんわりと伝わるとても惹かれました。	尋ぬれば宿まで五分枯尾花	紅点々雑木に絡む烏瓜 「紅点々」のリズムが良く、形態をよく描写していると思います。烏瓜の赤が光っている様子が目に浮かびます。	嵐山（らんざん）や八入（やしお）の雨に染まる秋 一入どころか八入の雨と詠み嵐山の染まりゆく秋を切り取られた佳句と 思います。雨が降るごとに紅葉が進む秋を「八入の雨」と表現したとこ ろがすばらしい。「八入の雨」美しい言葉ですね。俳諧味の溢れる句。	オリオンのベルトあたりは願ふ夢 手を合わせる気持ちが湧いてきます。「ベルトあたりは願う夢」とはな んなのか、考えさせられるのがいい。	長き夜や入浴剤に染まりさう 疲れがとれるまで、ごゆっくり。	風に触れリトマス紙の如櫛紅葉 赤や青や黄色に染まる櫛の葉をリトマス紙と詠んだことの共感しまし た。	ロヒンギヤのテントの破れ雪催 ロヒンギヤの人々に救済を！	無花果や喜寿といへども青春歌 喜寿と言えども青春歌、同感です。人生は幾つになっても青春です。 大きな声で歌を唄いながら発散しましょう。喜寿と青春歌の対比が素晴 らしい。	秋澄むや墓苑ひとつの囲まれて 柿干して父母居ぬ家の広さかな	柿干して父母居ぬ家の広さかな 寂しさをひとしお感じます。吊るし柿に去年は健在だった片親まで亡く し淋しさのなかに家庭愛を感じる句。長い軒に柿干し終えて、ふと見る 座敷には誰も居ない、家の広さを感じじんわりと寂しさが広がってしま した。亡きご両親を、「干し柿」、「家の広さ」を、寂しく懐かしく思 う作者が、ほのぼのと感じとれる。	糠床を探る右の手冬隣 ひんやりと冷たい糠床の中で右手は何を思っているのでしょうか。糠床 に入れた手に冬の近づきを感じた季節感のある句。糠床に入れた手に冬 が近いと。感覚のいい句です。糠床の胡瓜や茄子が少なくなると、手も冷 たくなつた。季節感あり。	立冬や俳句の殻にひびが入り 古賀由美子
青木鶴城	秋谷風舎	森美枝子	渋谷きいち	反町修	光雲 2	石関六弦	新曆文	本橋稀香	池田珪子	保坂翔太	茂樹	原洋一	檜鼻ことは	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
ことは きいち 光雲2 ほのる 美枝子 風舎 洋一 はるみ たか子 かげろう 稀香			マスマ 正信			月を	珪子 喜夫 寒立馬 いちい	光雲2				茂樹		ひろし ことは
大地凍つ瓦礫の壁のバンクシー	霜月や窓辺に寄りて眉を引く	稲すずめ豊暁の穂が果てもなく	長旅の鯨ひと息大空へ	車降る冬夕焼けの真っ赤なり	拝啓と句を添へ母に一葉忌	柿狩や姉の話に盛りあがる	レコードの擦るる音やすすろ寒	小春日や窓際猫の予約席	かまど猫届けておくれラブソング	落葉踏む音軽やかに夫と往く	散歩道踏みためらひて柿落葉	小春日の先客は猫木のベンチ	天気図の風速表示石路の花	物干しに家族の揃ふ良夜かな
岡田芳春	霜里	寒立馬	はるみ	岡本たか子	俳爺	木村るみ子	龍野ひろし	後藤允孝	望月のぞみ	倉田詩子	後記朝香	丸山マスマ	網野月を	立野音思

名月を眺めようと家族うち揃い物干場に。物干し台に家族そろって眺める名月、いい景です。

猫の日向ぼこ暖かそうです。

近頃は又レコードに人気がある様です。沢山捨ててしまつて後悔しております。季節の季節感が伝わる。昭和の風情か、針の擦れ音が聞こえる。擦れる音と「すすろ」の音が重なる。

柿狩の場にお姉さまは不在だと感じました。

ザトウクジラは夏はアラスカ沿岸などで餌をたっぷり摂り、冬になると出産、子育てのため日本近海にやつて来るといふ。長旅をして来た鯨が大きく息を吐く。勇壮で迫力が感じられる。大海を回遊する雄大な姿。元気の貰える。

小春日のほほえましい一瞬をきりとつたとてもいい句です。

バンクシーがウクライナを訪れていたとは、驚きでした。瓦礫の壁のバンクシーが描かれた絵が、よく有つていて、戦地はもう冬、瓦礫の壁にバンクシーの反戦画が印象的。ウクライナの悲惨な状況が脳裏に浮かびます。近頃話題となつたニュースをうまく詠みこんでいる、バンクシーが世界中の目に関心するウクライナに引き寄せた。長い軒に柿干し終えて、ふと見る座敷には誰も居ない、家の広さを感じじんわりと寂しさ望をいだかせる時季語が秀逸。凍つ大地は、いづれ解けるところと季節語がとても生きてて感服しました。

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十一月
	朝香	ほのる	珪子	稀香 喜夫 きいち はるみ かげろう	るみ子	かげろう 鶴城	暦文	しんい	稀香 寒立馬			由美子 のぞみ 月を 茂樹 いちい	ひろし		
秋の滝地震の跡なる岩の位置	朝日差す蒸籠の中の栗おこわ 栗おこわの匂いが満ちているような明るい楽しい句です。	薪割りの筥が筥山の秋 中七の言葉の重ねが良い。	やはらかひ十一月を好きと言ふ 心情が伝わる。日本の一番美しい月ではないでしょうか。もののあわれが分からないなどおっしゃらず。	寄り添ひて傘一本で足る時雨 傘一本で寄り添うのは恋人同士、親子連れ友人同士いづれも寒い雨が暖かな心持ちとなる景です。長い軒に柿干し終えて、ふと見る座敷には誰も居ない、家の広さを感じじんわりと寂しさ広がってきました。お幸せですね。こういう場面になつてみたい。時雨の描写に相合傘を用いたのが的確で好感。時雨の描写に相合傘を用いたのが的確で好感。	診察を終へて小春の昼下がり 検査結果が良かったんでしょね。ホツとした様子。	経めぐりてまだ決められぬ酉の市 「これ」と決められない心情が見えてよい。「経めぐる」が大袈裟すぎるのが良い。	我が心石にあらずや冬木立 枯れ木は翌年には花も咲きますよね。	寒月や五葉の松の影清か 無駄がなく格調高い句と共鳴致しました。	切り岸の壁画のごとき蔦枯るる 真つ赤な蔦紅葉がまるで絵画のように切岸を彩っていたのだろう、やがて枯れ色となり冬がくる。枯れた蔦がその風景に調和し、切岸の鋭い傾斜を強調している。	冬めいて遠く讚美歌聞ゆ朝 冬めいて遠く讚美歌聞ゆ朝	山茶花や金毘羅詣に汗を足し	ひと部屋は灯り消えおり父の咳 情景が浮かび父の咳が聞こえます。幸せに過ごした日々も遠い思い出。咳をする父親のこと、気にかけている。灯りの消えた部屋はお父様の部屋隣の隣だと解釈しました。父への情が出ています。年老いた父親への思いが感じられる。	露こぼる焦げ跡のこる石垣に 光をとらえたモネの蕁塚。		
茂樹	池田珪子	保坂翔太	古賀由美子	原洋一	檜鼻ことは	山中いちい	染谷正信	日高道を	野田静香	かげろう	持永喜夫	ほのる	小林京子	しんい	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十一月
静香 ほのる 芳春	曆文 珪子	翔太 京子 朝香 いちい	洋一 マスミ 六弦			しんい たか子			道を	允孝 修 静香 正信		翔太		光雲2 道を 芳春 寒立馬	
愚痴ひとつ遺影に一つ庭の柿	初霜や郵便受けに文の無く 柿一つで愚痴を聞いてもらおう。いいね。寂しい景に柿の色がぼつと灯ります。遺影について愚痴を言ってしまう気分が、「ひとつ」繰り返して明るく伝わってきます。	石仏のおほどこかに座す石露の花 本当ですね、来るのはチラシばかり。同感です、私も社会からの疎外感を感じ、新聞だけ抱きしめて部屋へ入ります。	秋祭話し巧みな飴細工 石仏の「おほどこかに座す」と詠んだところが良い。石露の花との取り合わせがとても良いです。「おほどこか」という言葉を知りました。中七が いいですね。季語もよく合っています。どつしりとした石仏と石露の花の幹旋が妙。	茶の花や慣れ親しみし備前壺 飴細工師の雄弁な口上について引き込まれそうな景が見える。よくある光景。つい足を止め、時には口上につられてつい買ってしまうことも。祭りの楽しさが伝わって来ます。	悴け鳥を励ましてゐる悴け人	見あぐれば赤銅の月冬初め 今年の月食よく見えましたね、残念ながら句は出来ずに。歴史上の有名な方ご覧になられたか、どうか、その皆既月食を上手に表現されています。	浮寝鳥天守を映す水の碧	芒野のテントホームの暮らしかな	わが裡に空席一つ神の留守 神の留守の季語の幹旋が良い。	夜鳴蕎麦屋台に見ゆる無言劇 以前はよく夜鳴き蕎麦屋が来ていましたが、昨今余り見慣れなくなりました。下五の無言劇が良いですね。夜鳴蕎麦の屋台に見える人生模様が切ない。無言故に暖かさが伝わってくる。深夜に屋台の蕎麦を食うのだから相当深い関係だろう。でも何故か無言で訳ありそうなカツプル。ドラマがあります。	仏前に新酒とくとく供へけり	豆腐屋の女将は外人秋櫻 豆腐屋の女将が外人だという驚きを素直に詠んでいる。	紅葉散る幼き子らの跳ねるたび	人生の余白に仄か帰り花 リズム感のよいしかも深い句ですね仄かの表現が効いています。「余白」の措辞が良い。中七下五、音読した時のリズムの良い楽しい句です。何の花かと思いつつ自然からの贈り物に心穏んだ様子が浮かぶ。	
後藤允孝	後記朝香	倉田詩子	立野音思	丸山マスミ	網野月を	森美枝子	青木鶴城	秋谷風舎	光雲2	渋谷さいち	反町修	本橋稀香	石関六弦	新曆文	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十一月
	ひろし 修 鶴城		るみ子					静香 芳春		たか子	しんい			るみ子	
光る空百万石の冬構	毛糸編む夕餉の箸を並べ置き <small>夕餉の仕度を終えほつと一息。夕餉の支度をして夫の帰りを待つ妻は寂しさを毛糸を編んで紛らす。夫の帰りを待つ幸せな時間を感じる。</small>	初霜を踏む音しづか墓参り	冬浅し釣り舟遊ぶ鳴門うず <small>季語と情景が良い。</small>	空澄めり最上階のクレイン車	新米や夜に明るき精米所	隠したるを忘れ探すや暮早し	九十九折の弧線こんもり落ち葉の黄	冬立ちぬ面取り大根昆布の上 <small>大根の湯気が冬を連れて来た。大根は季語だが煮物なので、気にならない。中七下五、音読した時のリズムの良い楽しい句です。</small>	秋高く海の青濃し空さらに	兩岸の紅葉流るる川下り <small>紅葉流るとは誠に上手な表現であります。</small>	引き返すことも大事や椿の実 <small>matutana ネットで添削頂き中七まで一緒、座五が穴惑ひでしたが、椿の実の方が離れ具合がよろしいかと。</small>	キャンパスを小判のごとく銀杏降る	新そばを丸めて遊ぶ三歳児	晩秋の夕日とどむる由比が浜 <small>中七が良い。</small>	
日高道を	ほのる	かげろう	持永喜夫	岡田芳春	小林京子	しんい	はるみ	霜里	寒立馬	木村るみ子	岡本たか子	俳爺	望月のぞみ	龍野ひろし	

												78	77	76
												美枝子	風舎	六弦
												手習ひは般若心経薬喰	初めての季語です。 蜘蛛の糸に縋るひと葉を小春風	人波にかこち腕組む一の酉 年末の賑わいが早く戻って、こんな思いをしたいですね。
												染谷正信	野田静香	山中いちい